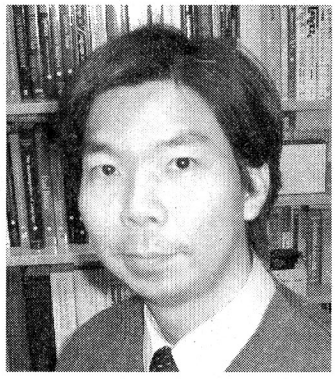
東大で学べること

教養課程で大切なのは様々な学問に触れること

東大といえば駒場の教養課程が大きな特徴です。遊んで過ごすのも良いですが、それは少しもったいない。きっと学べるものがありますよ。私たちの先輩でもある教官3人に教養課程の過ごし方をアドバイスしてもらいました。認知神経科学の酒井助教授、スペイン語文学の齊藤助教授、環境経済論の後藤教授。先生たちの学生時代とは……。



酒井邦嘉（さかい くによし）助教授

87年理学部卒
広域科学専攻

●駒場の学生時代

大学1年のとき、私は物理科学に非常に興味があり、取る授業もそれに偏っていました。現場の話を聞き、最先端の雰囲気をつかむことができたのはよかったのですが、物理の壁のようなものが見え始めました。理論と実験のギャップが大きすぎることに気づいたのです。そのためか、2年生になると、生物に強い関心を持ちました。ちょうど分子生物学が出来上がってきた時期で、DNAの2重らせんを発見したクリックのように、物理学者が生物分野でも十分活躍できると知ると、これこそが自分のやりたいことだと思うようになりました。

進学先は、生物物理ができるということもあり、物理学科にしました。決心するまでにはもちろん迷いもありましたが、アインシュタインの『一般相対性理論』を原典で読んで理解できたことが物理を選ぶ最大の決め手になりました。これは当時の私の能力というよりも、最後まで読み通そうという意志に多分に依存していたと思います。大学時代は、自分が何をしたいのか、何ができるのかを探る時期といえます。周りに流されず、個を大切にして、自分はこれだ！ というものを見つけてほしいですね。

●教養課程

私は総合科目で「認知神経科学」の講義を受け持っていて、脳に関する一般向けの話をしています。脳というと理系分野と考えられがちですが、文学部でも工学部でもどこでも研究できる境界領域です。実際、私の授業を取る学生に文理の偏りはありません。ただし、講義の意義はそれぞれの進路や目的によってさまざまです。もともと興味のある人にとってはより深く考えるきっかけになりますし、それ以外の人にとっては、一般的な知識を深める機会や進学の参考にもなるでしょう。講義では最新の研究成果を伝えるように心がけていて、学生にも喜ばれています。学問の現場の雰囲気に触れることができるのも、教養のひとつの意義といえるでしょう。

教養で学ぶことは、必ずしも自分に直結するわけではありません。ですが、私はそれでも構わないと思います。全然関心のない授業を取り、面白さに気づいてその方向に進んでもいいし、関心があったのに期待外れだったという講義があってもいい。いろんな学問分野を知って、進路選択の材料にすればいいのです。

すでに進路を決めている人に関しては、進路にとらわれすぎないほうがよいと思います。自分は○○学科に行くからこの講義を取らなくてはいけないとなると、かえって教養の面白みがなくなるのではないでしょうか。

必修となっている語学も、実用性は低いように思えるかもしれませんが、新しい言語を学ぶと、全然知らなかった世界が見えてきます。すべての学問に当てはまることではありませんが、私のような境界領域の学問では、視野を広げておくことはよいことだと思います。

●今の学生を見て

今の学生は昔より考えることが少なくなったと思います。この違いの原因の一つはインターネットにあるでしょう。講義で不明な点があっても、キーワードを入力するだけで瞬時に検索できますし、先生に直接メールで問い合わせることまでできますからね。昔は調べるにしても、どの事典で調べるかという問題から解決しなければなりませんでした。本を見つけても必要な情報がすべてあるわけではないため、自分で補って考えて初めて理解に到達することができました。つまり、情報の得がたさが考えることにつながっていたのです。時代が変化したとはいえ、学問においては考える時間を十分持つことは必要です。できるだけ受け身にならず、自分の頭で考え、納得のいかないことに対しては疑問を発してください。それが学問の芽なのですから。